
魔法の後に、

上弦志吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の後に、

【Nコード】

N5147P

【作者名】

上弦志吹

【あらすじ】

いまとは少し違う、世の中に魔法使いが存在していた場合の物語。魔法の意義と、魔法使いの存在についての物語。

始まり

「ねえ、見える？ アト君」

小柄な女の子は僕の顔を覗き込んで、そう言った。

「あのね、誰にいつてるのかな。君に見えるものが僕に見えないはずないでしょ」

僕がそう冷たく返すと、むうと唸って再び視線を遠くにやる。可哀想なことをしたかなとも思ったが、今はそんなことを気にしている場合では無い。戦っているのだ、高校の先輩が。

「アト君、もうちょっと近くで見ない？ ここからだ、見にくいよ。それに不法侵入っぽいし。逮捕されちゃうかも」

「うるさいな。このビルの屋上で見ようって言ったのはそっちでしょ。それに、逮捕されそうになったら響の得意技のパンチ・キックでどうにかなるでしょ。それにこれ以上近づいたら気付かれる。警察に見つかるより、隣のエリアの魔法使いに見つかった方がよっぽどやっかいだよ」

響と話しているうちに戦いは終わっていた。いや、正確には戦いなどでは無かった。あれは処刑だ。空間から産み落とされたというだけで、人間の敵と判断され抹殺される。だけど同情しているわけでもない。どこからともなくやってきたそいつらは、十中八九人間の害になる。ちなみに僕の父と、横に居る小柄な女の子・響の両親はあいつらに喰い殺された。思い出しただけも涙が出そうになる。

でも、響は泣いていない。だから僕も泣かなかった。彼女の方が辛いはずだから。

「もう帰ろう。あ、一応事務所に寄って報告しないといけないね。来須エリアと霞エリアの境界付近で戦闘があったわけだし。先に帰ってる？ それとも僕の家に来る？」

「アト君が私に急に優しくなるときは、昔のことを思い出した時。変わらないねえ」

「来たくないのなら別にいい」

僕がふいつと顔をそむけて歩き出すと、後ろから大慌てで付いてくる気配。横に並んで必死で笑顔を繕う。

「い、行くよ。アト君のお母さんにも最近会ってないし。今日の晩ご飯はなにかなー」

携帯を取り出し母さんに電話をかけようとしたその時、ブルブルと携帯が震えだした。

「あれ？ 母さんからだ。何だろう。……もしもーし」

『あ、アト？ 母さん、今日は遅くなるから晩ご飯は適当に食べてね。明日の宿題を忘れずにやっておくように。ついでに歯磨きも忘れちゃだめよ』

「えー、今日遅いの？ せっかく響がうちに来るのに。まあいいけど。じゃあお仕事頑張ってるね」

『はいはい。そつちもお楽しみ頑張つてねー』

最後に訳の分からない事を言われて電話を切られた。正直、響に聞かれなくて良かった。なぜなら、今でこそ落ち着いてはいるが、中学時代は相当荒れていた。それこそ毎日ケンカの日々だ。噂だが隣の県の高校に一人で乗り込んだこともあるとかないとか。

「待て。お前らこのビルで何してた？ 白状しないと拉致るぞ、コラ」

そのドスのきいた声に驚き後ろを見ると、いかにも裏社会で生きていそうな男性がポケットに手をつ突っ込んで立っている。どうやら裏社会で使われているビルの屋上を拝借していたようだ。

「い、いや……ちょっと屋上で星見を……」

まずい。殺されるかも。おまけに手は震えて、尋常じゃない汗が出てきた。響の前でみつともない。

「なにになに？ アト君、怖いのかー？ かわいいー！ でも大丈夫だよ。私がいるんだからね」

きやぴきやぴと一通り僕をからかった後、おもむろに、でも至つて自然に腹に一撃加えた。

「ぐふう！ がはっ、ごほう……おまえ……みぞおちを……」

男は膝をつき、土下座でもしているような体勢になった。それを見て響は、少し距離を取り、

「アト君！ 無回転シュートいきまーす！」

そして勢いよく走りだし、男の頭を思いきり蹴った。男はごろごろと転がり、唸っている。これは少々やりすぎではないだろうか。

「アト君！ 次は八二カミ王子やりまーす！」

今度はどこから持ってきたのか、鉄パイプを持っている。頭はさすがにまずいと響なりに判断したのか、脇腹に鉄パイプを思いきりぶち当てた。当然、男は悶え苦しんでいる。

「響！ 逃げるぞ！」

響の腕を無理やり掴んで、走り出す。証拠になる鉄パイプは響がまだ手に持っている。今日は制服を着てないし、日は落ちて顔を見られる心配もないはずだ。身元がばれる心配は無い。

だけど、それ以上に心配なことがあった。あれほど躊躇いなく人を鉄パイプで叩けるものなのだろうか。あきらかに暴力を振るうアイドルが低い。

彼女はいつか、人を殺してしまうかもしれない。

始まり（後書き）

まだ書き始めなので、あまり設定が決まっていません。
よろしく願いますね。

月野家にて（前書き）

月野家にて、

月野家にて

魔法使いは偉大だ。

昔、誰かがそう言っただけ。

なぜ、偉大なのか……。それは訳の分からない化け物と戦う力があり、そして現に戦っているからだ。僕も一般的に子どもと言われるような頃から戦っている。でもだからといって自分が偉大だと思っただけで、この手で化け物を殺すなどしたことも無い。僕は単に人より多少優れた能力があるだけで、一般的にみんなが思っているような魔法使いではない。

——魔法など使えなくても魔法使いは名乗れるのだ。

僕の横でつまらなそうにDVDの映画を見ている折橋響はその最たるものだ。

「はー……なんでミュージカルの映画なんて選んだの？ 意味分かんないよ。なんかいきなり歌って踊りだすし。バカみたい」

僕が選んだ映画はどうやら響には不満だったらしい。ストーリーはアメリカの高校を舞台にしたミュージカルで、アメリカではとても人気のシリーズだと聞いている。

「僕は好きだけどなあ、ミュージカル。アメリカの映画なのに銃は出てこないし殺しも無い。健全で王道ってあたりが逆に斬新だよ。それともスポーツ系の映画がよかった？」

「ランボーがよかった」

また古い映画を注文したものだ。女の子が好んで見るような映画でもなかるうに。

「アト君さあ、まだ他のエリアの魔法使いをストーキングしてるの？」

映画に飽きたのかソファにぐったりと背中を預けて、ひどく失礼なことを聞いてくる。

「あのね、ストーキングって言わないで。それに他の魔法使いを調べるのはリーダーから言われてやってることなんだよ？ 知ってるでしょ、響も。僕が調べる時は響に付き合ってもらってるわけだし」

「それは分かってる。でも何のためにそんなことやってるの？ せこせこやってさ、卑怯な感じが否めないよ。それに魔法使いだってことも隠してるし」

「一回しか説明しないからちゃんと聞いてね。まず、僕たちの敵はあの化け物だけじゃない。他所の魔法使いだって敵みたいなものだよ。エリア拡大に躍起だからね。だから攻めてこられた時のために他所の魔法使いの情報を集めてるの。それに魔法使いだって隠すのは、そっちの方が動きやすいからに決まってるよ。僕の高校には白銀先輩っていう有名な魔法使いの一族がいるんだから」

ふーん、と興味無さそうに僕の話を手く流した。そして興味無さそうにミュージカルを見ている。もう帰ればいいのに……。

「アト君、そろそろ風呂に入りたいな。ちょっとお湯、入れてきてよ。それで風呂から出た時に、丁度ご飯が食べられると嬉しいな」

「帰らないの？ てかシャワーで勘弁してよ」

「それはいいけど、めんどくちやいから泊まるね。そういえば明日、アト君の高校って学園祭だね。友達と行くからね。案内よろしく」

重い腰を上げて響はそのまま風呂場に行ってしまった。あとでバスタオルと変えの下着を持って行ってあげないといけない。彼女は頻りに泊まりに来るので、着替えやらなんやらは一通りそろっている。一人暮らしの彼女、そして母親と二人で暮らしている僕たちは、もはや家族みたいなものだ。

家族……か。正直それである必要は無かった。ただ敵になることを防げればそれでよかった。彼女が好きとか嫌いとか、そんな感情的なことじゃない。危険なのだ。僕にとって彼女の存在は。

——だから僕はずっと彼女のそばにいよう。彼女がそばにいれば、大抵のことには対処できる。

もちろん、彼女の力も借りて。

学園祭 1 (前書き)

学園祭にて

学園祭 1

「今日は待ちに待った学園祭です」

誰がこの定型文を言うのだろうか。校長か、それとも生徒会長か。それとも子どものような定型文から脱却できるのか。

答えは否だった。愚かな校長よ。まるで小学生の宣誓でも聞いているようだったぞ。親御さんに聞かれなくてよかったな。それともウケ狙いだったのだろうか。だとしたら優秀なつつこみを隣に配置しないとボケが理解できませんよ、校長。

とまあ、そんな珍事から始まった学園祭だが、委員の僕たちを煩わすようなことも無く、今は昼休憩だ。といっても昼ご飯をゆつくり味わう事も出来ずに、見周りに行く必要がある。最近は何騒だから妙な人が入り込んでいるとも限らない。これからまた美藤さんを見周りだ。

「しかし……」

空気が重い。なぜこの人と昼ご飯の時間が重なってしまったのだろうか。そもそも今、この部屋は外部の人間はもちろん、一般の生徒も立ち入りを禁止している。この人も学園祭に関わっていたのだろうか。

「あ、月野君……もう食べたの？ ちょっと待っててね。急いで食べるから」

「あー、いいいいいよ。急いで食べてのどにつかえたら大変だから。

だからもつと落ち着いて、ね？ 一口に30回は咀嚼しないといけないって、保健室のポスターにも書いてあったでしょ？」

僕は30回も咀嚼するのは御免だが、美藤さんに30回咀嚼してもらわないと休憩できない。

「もぐもぐ、なんで30回なの？ もぐもぐ」

「え？ えーつとねえ、確か唾液が分泌されてどうのこうの……」

「白銀先輩、なんで30回がいいか知ってますか？」

もともと僕に聞く気など無かったようで、答えに迷いが出たとたんに白銀先輩に振りやがった。もう付き合いきれん！

「月野君の言った通り唾液が多く分泌されるからだ。唾液が多量に分泌されることにより口腔内の乾燥を防ぎ、そして歯周病予防にもなる。それに咀嚼運動により顔の血行が良くなり元氣そうな顔つきになるんだ。だから月野君の言った通り、30回咀嚼したほうがいいぞ」

「さすがです！ 白銀先輩も30回咀嚼してるから、美人でスタイルも良くて勉強が出来るんですね！」

美藤さんの乱暴で強引な感想に、白銀先輩も若干引き気味だ。しかし、それにしてもパーフェクトな解答だった。勉強が出来るというのは本当らしい。

「……………ん？」

ちょっとした違和感。でも、この感じは今までに何度があった。確か……すぐ近くで化け物が出た時と同じ感じた。

「どうしたの？ 月野君。難しい顔して」

「いや、少々まずい事になりそうかも。ちょっとこっちに来て、美藤さん」

美藤さんと共に出現ポイントであろう中庭を見つめる。そこには大勢の人間が学園祭を楽しんでいた。容易に想像がつく。こんな場所に化け物が出たら、いかに優れた魔法使いが対処しようともパニックは避けられない。ある程度の被害は仕方が無いと考える他ないな。

そろそろ一般の人にも見えるほどまでに感じる魔力が強くなった。

「美藤さん、あそこ。見えるでしょ、なんかやばそうなヤツが」

「んー……えっ！？ あれって……」

ぎりぎり人型をしている化け物。周囲の人間はその異様なモノに気付いて、はやくもパニックになっている。だがそれでいい。誰もが誰よりも早く逃げることを選択すれば、多分みんな生き残るだろう。

「美藤さん、化け物が出たって校内放送でみんなに知らせて。それでとりあえず、みんな学園の敷地から避難ね。その後、美藤さんも敷地外に避難。よろしくね」

「校内放送って……そんなの勝手に使えるわけないよ！ 先生に許

可を貰わないと……」

「大丈夫だよ。あの化け物が出た以上、その責任は全てこのエリアの魔法使いにあるからね。美藤さんがやったことも、魔法使いが来るのが遅いからこうしたんだって言えば何の問題も無い」

彼女はすこし考えた後、走り去って行った。おそらく放送室に行ってくれたのだろう。

「随分と冷静な判断が出来るんだな。自分で動いた方が良かったんじゃないのか？ 月野君」

中庭はまだ完全に人がはけていない。この状況で僕が行ったら戦いが始まってしまいかねない。化け物はまだじつとしていることだし、少しここで待とう。

「白銀先輩も落ち着いてるんですね。さすが魔法使いです。でも化け物が出てますよ？ 行かなくてもいいんですか？」

「この学園は霞エリアだ。来栖エリアの私は出が出せん。ちなみに私たちはその化け物のことをジュセと呼んでいる」

「そう……ならそこでじつとしていればいいさ。10年前と同じようにね」

そう吐き捨てて部屋を出て行こうと、ドアに手をかけた瞬間、腕をぐっと掴まれる。

「なにを言っている。お前、あの時のことを知っているのか？」

「離せ、干渉する気か？」

干渉という言葉に驚いたのか、掴まれていた腕はすぐに離された。だが先輩の視線は僕の目を捉えたまま離れない。

「ふう……仕方ないね。なら教えてあげるよ」

一歩離れて、僕も彼女の瞳を見つめて言う。

「僕は霞エリアの魔法使い、月野アトだ。化け物が出た以上、これより魔法使いとして行動をする。これ以上僕を引きとめるというのなら、霞エリアへの干渉とみなす」

そのまま部屋から格好よく出て行こうとしたが、バッグを忘れていた。戦うために必要な物は一通り通学用のバッグに入っているのだ。

ショルダーバッグを肩から下げ、気合を入れなおす。敵は人型。一般的に人型に近くなればなるほど知能も高く、危険とされている。はてさて、どうしたものか。

学園祭 2（前書き）

学園祭にて

学園祭 2

さっき美藤さんの慌てた校内放送があった。そのおかげが一階まで下りてくる合間、誰ともすれ違わなかったし、美藤さんも逃げだしている頃だろう。

だが、おかしいことに校内にはまだ少なからず人が残っている。どうせ魔法使いと化け物の戦いが見たいといったところだろう。でも魔法使いでない、一般の人間であろうとも知らればこれから動きが取りにくくなる。だから流れ弾が当たって死んでくれるのを祈ろう。危険だと知りながら見物に来るやつの命など、むしろ消え去っていただきたいくらいだからね。

「さてと……」

敵の情報を少しでもつかんでおきたい僕は、植木からびよこつと顔を出し、化け物を見つめていた。

「ぎりぎり人型をしてると思ってたけど、結構知能は高そうな感じだな。言葉くらいは話せるかも。大きさも大人の人間と変わらないし、圧倒的な魔力を秘めているわけでもなさそうだ。うまく連携がとれれば楽勝かも」

連携をとるためには響を見つける必要がある。どこにいるのかな……？

「あ！……ん？ あれは響じゃないな」

化け物と少し離れた距離に女の子がいたので、響かと思ったが違

ったようだ。この混乱で足を怪我した上に、あの化け物を見て腰が抜けてしまったといったところか。

あの子を放つといて戦う事は出来ない。さすがにあの距離だと巻き添えだし、そもそも化け物に恐怖しているのなら、それこそ魔法使いの出番だ。僕は彼女を助ける。化け物の相手は他の魔法使いにでも任せよう。霞エリア最弱の僕がわざわざ戦う必要はない。

こそそと植木の陰に隠れながら、女の子に近づく。化け物は出現してから動きを見せていないし、女の子を連れて戦線離脱だ。

「こんにちわ、学園祭委員です。ここは危険なのですぐに退避しましょうね。足は大丈夫ですか？」

なるべく優しく声をかけて、足の怪我を確認する。やはりこけただけなのか、ただのすり傷だ。

「とりあえず消毒しちゃいますね。大丈夫ですよ、沁まないタイプなんで」

響がよく似たような怪我をするので、この手の手当はお手の物だ。最後にポケットからハンカチを取り出して、足に巻きつけてあげれば完成だ……と思ったが、このハンカチは清潔ではない。バッグから綺麗なハンカチを取り出して、巻きつける。

「これで大丈夫です。とにかくここから……」

魔法使用の可能性あり。照準は僕および女の子。たいした魔法ではないが、遠距離からの攻撃魔法と思われる。回避が望ましい。

「そりゃ無理だよ。応戦しないと……」

「？ どうしたんですか？」

女の子の問いなど無視して、右腕にありったけの魔力を集中させる。僕が平時扱える魔法は、自分の身を守ることのできる最低限のものだ。本来ならば一目散に逃げるのだが、この女の子を連れて逃げている暇は無い。

植木を飛び越え、既に放たれた魔法に対して右手をつきだす。パンチではない。魔法に対して、自身の魔力をぶつけるだけの単純なものだ。

パンツ！ と魔法が弾けた。それと同時にブチブチという嫌な音を聞いた。だが、それでも、

「イタタタタ、いきなり撃ってくるなんて酷いよ。血が出ちゃったじゃんか」

袖をめくると皮膚が肘のあたりまで裂けている。これでは当然、戦う事など出来ない。まあ、そもそも戦って勝てる相手でもないが。

「悪いな。気配がしたので試しに撃ってみたのだが、まさか当たるとは思わなかったぞ。すまん」

「別に謝る必要は無いけどさ、アンタは一体なんのためにここにいるの？」

「強いヤツと戦うためだ。それ以外のことは知らないし、興味も無い。お前は強いか？」

「魔法使いと戦いたいわけじゃなくて、強いヤツと戦いたいって言うんなら、僕はだめだ。弱いからね。そもそも出現する場所が間違いだよ。ここから東に10キロも行けば強い奴が出てくるから、そっちに行けば？」

「それはいいことを聞いた。後でそちらにも足を運ぶでしょう」

後で……か。大きな被害が出る前にさりげなく来栖エリアに誘導しようと思ったのに、これじゃダメだ。

——僕を殺してからエリアを移動するのだろう。

そんなことはさせられない。魔法使いとしてこいつの前にいる以上、こいつはここで仕留める。よそのエリアにでも逃げられたら、霞の看板に傷がつく。そうになったら給料が下がりがねない。

ブレザーを脱ぎ、植木の後ろにいるであろう女の子に投げ渡す。そして再びシオルダーバッグを肩に下げ、準備万端。

「ごめん、ちょっとそのブレザー持ってて。血とか泥で汚れても代えが無いからさ。あ……それじゃ逃げられないか。ブレザーはそこに置いてていいから早く逃げて」

「む、無理です。まだ友達がここに居るはずですよ。この子を見つかるまで、私が逃げるわけにはいきません」

「……あつそう。なら好きにして。申し訳ないけど忠告を聞いてくれない人を助ける気は無いよ。だから、君を含めてまだ学園に残っている人間の生死は、今から無いものとする。自らの意思でここに

いるんだからね」

「魔法使いのくせに私たちを見殺しにする気ですか？ 私が住んでるエリアの魔法使いは絶対にそんなことしませんよ？」

少し黙ってくれないだろうか。それに他のエリアの魔法使いと比較されるのはひどく癪に障る。

「おいおい、お前ら……もっと仲良くしたらどうだ？ どうせ最後の会話になるんだから」

「お前も黙っててよ、化け物。ここにいる弱い人間を殺してどうすんだよ。強いヤツと戦いたいんじゃないの？」

「準備運動だ。お前を殺した後、後ろの人間も殺す。お前が頑張れば後ろの人間も助かるかもしれんぞ？」

話に分かるヤツだと思っていたのに、違ったようだ。でもその方がやり易い事は確かだ。

単なる気持ちの問題だけだね。

「ねえ、化け物。ちょっとこれ見てよ」

傷ついた右腕を上げて、目の前のヤツに見せつける。

「なんだ？ 怪我が痛むのか？」

「違うよ。よく指を見て」

血でねとつとした親指と人差し指をつけたり離したり。

「だからそれがどうした？」

「アンタが死ぬ合図だよ」

その瞬間、化け物首にはナイフが突き刺さった。後ろから一突き。脳に刺さっているかもしれないし、脊髄を傷つけているかもしれない。いずれにしろ致命傷であることは確かだ。

「響、まだ息はあるよ。気をつけて」

「分かってるよ、アト君」

ここからが戦いの本番だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5147p/>

魔法の後に、

2011年10月8日12時47分発行